



画家  
少路 和伸  
さんに聞く

聞き手 外川 智恵さん ● 大正大学表現学部准教授

しょうじ・かずのぶ  
大阪府出身、大阪学院大  
学卒。グラフィックデザ  
イナーとして就職するが、  
2年で退社し、日本一周  
の旅に出て、その後、独  
学で画家を志す。アクリ  
ル絵具を使った明るい画  
風が特徴があり、作品は  
絵本やCDジャケットに  
も使われている。175月、  
九州芸術の社に少路和伸  
美術館が開館。青森のア  
トリエとの間を車で往復  
しながら創作活動を続け  
ている。

会社を辞めて出かけた  
日本一周の旅で分かったこと

外川 九州の中央部、熊本県と大分県にま  
たがる阿蘇くじゅう国立公園に隣接して、  
九州芸術の社があります。本日は、その中  
の少路和伸美術館を訪ね、画家の少路さん  
にお話を伺います。

少路さんの絵を直接拝見するのは初めて  
なのに、子どもの頃にどこかで見た風景の  
ような懐かしい感じがして、グッと引き込  
まれてしまいました。

少路 ちょっと不思議な気持ちになるかも  
しれませんね。私は25歳のときに会社を辞  
めて、全国を旅しました。仕事もしないで  
何をしているのかと友人たちからたびたび  
言われるので、それから逃げ出したような  
ものです。3週間くらいたったら帰ってこ  
ようと思って出発した旅が、結局は1年も  
続きました。

車にテントやいろいろな道具を積んで行  
きましたが、北海道に着いたときには、ほ

とんどお金を使い果たしていました。そのため、車を置いて自転車で道内を回りましたが、そこで出会ったのが優しくて温かい方ばかりで、お世話になったりいろいろなことを教えていただきました。そんな旅の先々で見た風景が、最初はものすごく新鮮に感じられたのですが、ずっと見ていると、デジャブ（既視感）というか、記憶の中にあるような場所がたくさんあったのです。この風景は、私にとって「魂の記憶」のようなものではないかと思い始めました。

そうして、旅を続けながら今後の自分の人生をあれこれ考えるうちに、世の中に何かを残したいという思いが強くなり、絵を描き始めました。

**外川** ご自身を表現する方法を絵に見いだされたのですね。

**少路** 落書き程度のもので、それも誰かのまねだったり、写真で見たような風景だったり。オリジナルって何だろう、自分って何だろうと、よく考えたものです。誰かが

言ったから、自分もそうする。メディアで紹介されたから、そこに行ってみる。つまり、自分で考えて行動を起こすということが全くなかったのです。

しかし、日本一周の旅をして分かりました。人はいろいろなものを手に取ってみて、何かを感じたり、あるいは自分には不要だと判断する。さらには見たいものがあれば探しに行つて、それでもなかなか見つからなかったものが、道に迷ったら突然目の前に現れたりすることがある。そういった経験が自分のオリジナルティー、ひいては自分の生き方につながっていくのだと。

生きていると、毎日、身の回りで何かが起きます。しかし、それが自分にとっていいことか悪いことかなどと、いちいち悩むことはもうありません。起きたことにきちんと取り組む、それが自分に与えられた役目なのだと思います。

### もう一人の自分

雲の上から語りかけてくる

**少路** これは、NHKから依頼されて制作した風景画です。私が小さかった頃は、おそらくこのような田園風景が日本全国に広がっていたのだろうと想像して描きました。

私は全て、想像で描きます。想像で描くことは大変でしたが、いまは面白くてしょうがないという感じですが。私の絵を見て懐かしく感じ、共感していただけるのは、私と同じような「根源的な風景の記憶」があるからではないでしょうか。

私は、絵にタイトルをつけません。タイトルがあると、それがフィルターになってしまつて、見た人が絵の奥に入り込めない。タイトルがなければ、その人なりに見て、感じて、絵の中の世界に入り込んでいくことができると思います。人間の脳はあやふやなところがあつて、自分が見たいように、あるいは言われたように対象を見てしまう。だから、私がタイトルをつけて「この絵はこういうふうに見てください」としてしまつと、そのようにしか見えず、全然面白く

少路 和伸さん



ない絵になってしまいうわけです。

**外川** お話を伺っていて、「考えたこと」と「感じたこと」の違いをはっきり意識して使い分けていらつしやるように感じました。

英語でいう think と feel の違いが、日本語ではあいまいですが、少路さんの中では明確なようです。

**少路** 私の場合は、結果的に使い分けているのだと思います。いつも、感じるままに生きようとしてきましたが、自分が感じたことを人に押し付けるのではなく、私はこう感じたけれどあなたはどう感じますかという、その違いにとっても興味があります。

**外川** なるほど。感じるままに生きようと、自分に言い聞かせていらしたのですか？

**少路** 言い聞かせるといっても、もう一人の自分が雲の上から私を見て、まだそんなことをやっているのか、もつと感じるままに生きなさいと言っている気がする、ということがあるのです。例えば、絵を描いていて、なぜこの部分がうまく描けないんだろうと落ち込んでいると、おまえはまだこのレベルなのだ、それを気付かせるためにこの絵があるのだと話しかけてくる。その声、ストーンと胸に入ってくるのです。

**外川** それは、何ともいえない、重いけれどもすごく温かい感覚を覚えます。

**少路** ええ、その通りです。人間は欲があるので、あれをやりたい、これもしてみたいと思う。その揚げ句に、自分ももつと力があるはずだと思ってしまう。あなたのいまの実力はこれくらいです、あなたがすべきことはこれですよと言われている声に気が付かず、違うほうへ行くから、こんなはず

じゃなかった、自分もつとできると思っていたとなってしまうのです。もう一人の自分から、いまはこれをしなさいと言われる、それがベストの状態なのです。

**なぜ、自分を信じられない人が多いのでしょうか**

**外川** 違和を覚えるということは、自分の感覚ではなく、誰かの判断に頼っているのかもしれないね。

**少路** それが全ていけないとまでは言いませんが、もう一人の自分の声とか直感といったものを、もつと信じて行動すべきだと思います。

自分は何のために生きているのか分からない、どうしたらいいだろうと相談されることがありますが、いまこれをやれという声が聞こえたら、もしくはそんなふうに思ったら、それをすればいいのです。

**外川** なぜ、自分を信じられない人が多いとお考えですか？

**少路** 周りの人を信じられないからでしょ





と思ったことがあります(笑)。

大学では、自分でカリキュラムを組んで学んでいかなければならないという経験が、自分という人間を作り上げるうえでとてもプラスになりました。

**外川** いま振り返ってみて、ご自身はどんな学生でしたか。

**少路** いい子ぶった腹黒いヤツでしたね(笑)。人前では「きれいにしましょう」なんて言っておきながら、自分の部屋はゴミだらけというタイプ。それが、日本中を旅しているいろんな人に会って、180度変わりました。北海道から九州、沖縄の波照間

島まで訪れ、最後に行った四国で、白装束のお遍路さんがたくさん歩いているのを見て、自分もこれだけいい旅をしてきたのだから、最後は四国八十八箇所を回ろうと思いました。このお礼の旅を終えた時に、生きていくってこういうことなんだなと薄々感じたのです。

**外川** 人生の早い時期にそれをつかんだって、すごいことだと思います。うらやましい！

**少路** 当時は、まだ確信するということまではいきませんでした。その後も自分の生き方を探し続けました。アルバイトもしながら、なんとかして絵を売ってお金を手に入れようとする。そこにジレンマを感じました。考えていることと実際にしていることが正反対でしたから。

**絵の描き方ではなく**

**絵を描く楽しさを教えている**

**少路** 35歳くらいの頃に、お金を追いかける必要はないことに気が付きました。人生

を振り返ってみたら、必要な時には必要なものが手元にあり、必要がないときにはそれがなかったのです。それ以来、明日のために稼がなくてはいけないという感覚が全くなくなりました。

**外川** 芸術家である私の夫も、同じような感覚を持っています。

**少路** そうでしょう。しかも、ご家族はそれが心配なのではありませんか。

**外川** 心配ですが、羨ましくもありません。

**少路** おそらく、ご本人は全然心配していません。心配している周りの人が、私は不憫になります。私も、どうやって食べているのかと聞かれることがあります。こんなに顔色がよくて元気に生きている人間が、あなたの周りに何人いらっしゃいますかと逆に問い返します。

**外川** その調子で子育てするので子どもはのびのびしています。時折ハラハラすることもありますが。

**少路** ぜひ、そういう子育てをしていただ

きたいですね。私は子どもがいまませんが、子どもに接する機会は人一倍多い。先日も、大分の保育園で絵を描くワークショップを行いました。私は描き方を教えるという行いですが、私は描き方を教えるという行いですが、描き方を教えることはできませんが、絵を描く楽しみを教えることはできません。物心がつく4歳くらいまでの子どもには、これをして楽しみたい、ほかの人にこんなことをしてはいけないということ、体験を通して教えていただきたいですね。やる前に止めるのではなく、やらせてみて、楽しさや痛みを体験して覚えさせ、感性を育てる。それがないと、他人の痛みを感じることができなくなります。

いま、社会にゆとりがなくなると、お金の縛られている人が多いのではないのでしょうか。親も子どもに合わせて教育をしておきます。感性が育ちにくくなっているように感じます。皆と同じことをするのはなく、子どもの探求心を大事にしたほうがいいの

ではないかと思えます。

**外川** 確かに。自分で探す楽しさを、子どもから奪いたくないですね。

**「カレールーのおいを感じる」**

**それは私にとって最高の言葉**

**少路** 私は旅を通して、一つの大きなことを学びました。それは、人間は少々のことでは死なないということです。空腹のために道端の雑草を食べたこともありますが、



そういうサバイバルを一度でも経験すると、

おそらく豊かな生き方ができるようになると思います。

**外川** サバイバルと聞くと、一人でジャングルをさまようようですが、毎日を一生懸命に生きることもサバイバルですよ。

**少路** そうです。一生懸命に楽しく生きるものがサバイバルなんです。野外で自分で火をおこすと、楽しいでしょう。汗を流しながら必死にやって、ああ、やっと火がついた。そのあとにごちそうが待っている。

人生で何をするにも、一生懸命にやって、それから楽しみがある、ごほうびがもらえる。サバイバルと聞くと、すぐに「苦しい」という文字が頭の中に浮かぶ人が多いような気がします。

**外川** 受け止め方のちがいでしょね。少路さんは、まだサバイバル中ですか。

**少路** おそらく、一生サバイバルでしょう。欲しいものがたいした達成感もなしに手に入るようになったら、私はもう終わりだと

思います。絵を描きながら、思うように描けないといつも悩みつつ、次はもつとこんなふうに描きたいと思っっているから終わりがない。一生のうちに、自分はあとどれくらい絵が描けるだろうか。いまは、絵から「おい」が漂ってくるような、そんな作品を作りたいと思っています。

**外川** 私はこの絵を見て、カレライスのおいを感じました。私が育った環境が、この絵の中にあります。田園風景の中に農家が点在し、土曜日は小学校がお昼で終わるので、お腹を空かせて帰る道すがら、ほかの家の前を通ると必ずとっついていいほどカレレーのにおいが漂ってきたのです。

**少路** この絵を見てカレレーって、初めて聞きました。私にとつては最高の言葉です。人間って、そういう感覚も持っているんですね。この絵のどこにもカレレーは描かれておらず、たいていの人はお花がきれいとか、花の香りがするようだとおっしゃいます。  
**外川** こちらの絵では田んぼのあちこちか

ら煙が上がっていて、稲わらを燃やしているにおいが漂ってくるようです。

**少路** 稲わらを燃やすということ自体、私は知りませんでした。青森のアトリエで描くようになって、初めて見たほどです。

**心に残った景色を共有するために絵を描いている**

**外川** 絵の描き方は、どうやって学ばれたのですか。

**少路** 全くの独学です。私は教わったことはいないし、人に教えたこともありません。心に残るきれいな景色をたくさん見てきたから、これをほかの人と共有するために、絵という形で残しているだけなのです。

**外川** その感覚で臨めばいいのですね。「ぼくは下手」だからなどと思わずに。

**少路** 保育園や小学校、中学校で絵を描くワークショップを行います。教えるつもりは最初からありません。うまく絵を描けない、どうしたらいいかとよく聞かれます。そういう人は、もしかすると図画工作の時

間に白い海の絵を描いて、海は青いのだから白く塗ってはいけないと先生に言われたのかもしれない。その時から、その人は絵を描けなくなり、ほかの人と違うことができなくなる。しかし、その人が見た海は荒れて白波が立っていたので、白く塗ったのかもしれない。

ワークショップでは、犬の絵を描いても、ろうごがあります。ある生徒の絵を見て、ほかの生徒がこれは猫だと言う。そこで私は、これはこの人しか描けない犬の絵だといっています。このような個性あふれる犬の絵だけの展覧会があったら、ぜひ見に行きたいですね。

**いまの状況は全部自分の責任だ  
ということを感じながら生きていく**

**少路** 絵を表面的に見て優劣をつけるような世界から自由になってほしいと、私は思います。プロの世界でも、技法的には優れていなくても、その人しか描けないような個性あふれる絵が高く評価されることが

あります。芸術とは人の心を動かすものであって、評価とかお金が動かすのではないと思います。

**外川** 自分自身を生きたということを、どれだけ大切にできるか。いかに自分を信じて毎日を過ごすことができるかですね。

**少路** いまの自分の状況は全部自分の責任だということを感ぜながら生きていけば、もっと真剣に頑張れるし、ほかの人を大切にするようになる。自分を信じて行動していれば、そうなるしかないし、そこはこうするといよいよという声が聞こえてくるようになります。

**外川** 雲の上から、もう一人の自分が。

**少路** そうです。例えば、私がこの九州芸術の杜と出会ったのは約2年前です。大分の別府で個展を開く数日前に、熊本地震が起きました。開催があやぶまれた時、私は東日本大震災の体験を思い出して、動ける人は極力動こう、自粛はしないようにと言いました。そうやって個展を開催し、収益

は全て被害に遭われた方に届けました。翌年も大分県内で開催予定だったのが中止になったため、急いで会場を探したところ、九州芸術の杜で開けることになりました。その打ち合わせの際に、春に開く芸術祭のポスターに私の絵を使いたいというお話があり、承諾したところ、あとでポスターを見たら「少路和伸美術館、ブランドオープン」と書いてあったのです。

**外川** ご自身の知らないうちにお話が広がったのですか？

**少路** 私も驚いて聞いてみたら、場所を提



少路和伸さん(右)と外川智恵さん  
(2019年8月1日 九州芸術の杜にて)

供するから常設展示してほしいということだったので、ではよろしくお願ひしますと。こうして、この少路和伸美術館が誕生しました。

初めてここを訪れた時、入ってすぐのところにある榎木孝明美術館の建物を見て、私が地震の復興支援のために作ったポストカードの絵の中の建物にそっくりであることに気付きました。その時、私はここに呼ばれてきたのかもしれないと思ったのです。

芸術の杜のオーナーと話していて、いかサンタクロースの絵の美術館を作りたいと言ったら、すぐに山の中にある倉庫に連れていかれました。倉庫には大量の木材が積んであり、いつかと言わず、すぐにでもこれを使って建てようと言っていたのです。

**外川** 嬉しいつながりですね！ 導かれるように始まったサンタクロース美術館が完成したら、またお伺いしたいです。本日は、ありがとうございました。